

Title	乳癌検診といくつかの誤解
Author(s)	上田, 進久
Citation	癌と人. 10 P.23-P.24
Issue Date	1983-03-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/24088
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

乳癌検診といくつかの誤解

上 田 進 久*

昭和43年に乳癌検診が始まって以来、今年で16年目を迎えます。乳癌検診に着手した頃の詳しい経過を知っているものは、現在の医局内において半数以下となりました。中野陽典先生が、本誌第6号にそのいきさつを書いておられますが、私も先輩諸先生方からお聞きする以外は、言葉に言い表わせない様々の御苦勞を推測する他ありません。

最初は、吹田市、箕面市だけでありましたが、昨年57年の集団検診を行なった地区は、これらの両市に加えて、豊中市、池田市、大東市、四條畷市、藤井寺市、松原市、羽曳野市、河南町と、さらに新たに加わった、茨木市、摂津市であり、12地区をカバーする迄に発展してきました。大阪府下北摂地域と、東大阪地域、さらには南大阪地域に及ぼうとしています。

これらの乳癌検診によって蓄積された資料は、私達にとっても貴重であり、学会等を通じて報告され、日本対ガン協会や、さらには地域医療、地域の健康管理にも貢献されなければなりません。

昭和57年の乳癌検診では、総受検者数は、13,617名（初診8,940名、再診4,677名）でした。これは昭和43年に着手して以来10年間の受検者数が延20,695名であるのと比較すると、過半数を上回ることとなります。地域医療に関する人人や、受診される人達の“癌の早期発見、予防”に取り組む積極的な姿勢には、改めて感心いたします。

より充実した乳癌集団検診を目指して、この機会に、日頃、乳癌検診の現場でよく耳にすることで、気にかかる事柄のいくつかを、集団検診の資料をもとにして考えてみたいと思います。

57年の総受検者13,617名のうち、18名の乳癌

が発見されました。18名のうち、13名が初めて受診された人で、残りの5名が再診によって発見されました。再診者で乳癌の見つかった人達の過去の受診回数は、2回から13回にわたっています。

“乳癌検診を受けておれば、乳癌にはならない”という誤解

この誤解は、受診回数の多い人にみられる現象です。長年にわたって乳癌検診を受けているのだから自分は癌にはならない”と考え、検診結果が“異常なし”であれば、向う1年間の安全キップを手に入れた様に錯覚する人が多いようです。確かに、毎年定期的を受診すれば、次回の検診で異常を指摘される可能性は少ないと言えます。しかし、乳癌検診は、あくまでも癌の早期発見を目的とするものであり、癌の予防とは直接には関係ありません。

極端に言えば、乳癌検診で“異常なし”と言われたその翌日からは、新たに癌が発生するかもしれません。そこで大切なことは、自己検診です。自己検診の方法は、乳癌検診時にお渡しするパンフレットにも詳しく書かれており、又ビデオなどでも御覧いただいていると思います。ポイントは、毎月1回、生理のある人は生理が終了して約1週間後に、乳房の軟かくなった時期に行なって、自分の乳房の状態を憶え、その変化に注意することにあります。これは、癌ノイローゼとは区別されます。むしろ癌ノイローゼの人は、人一倍心配はしますが、積極的に自分の乳房を触診するのさえ恐しく、検診を受けようとはしません。年1回の乳癌検診——これは、早期発見につながります。実際13回目にし

* 大阪大学助手（微生物病研究所附属病院外科）

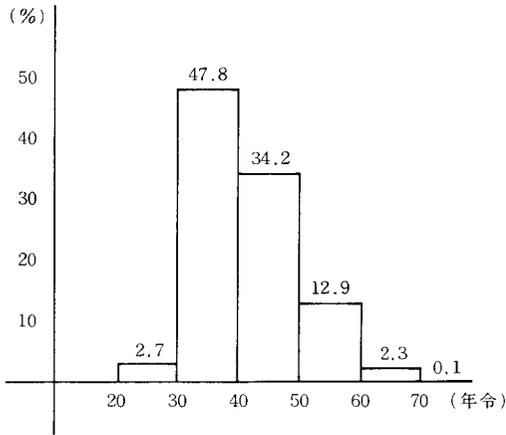


表1 乳癌集検受診者年齢分布

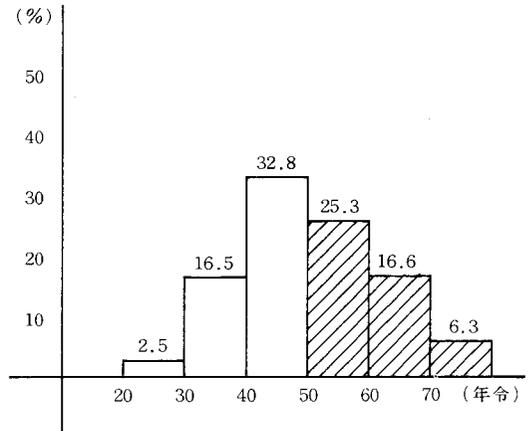


表2 乳癌患者年齢分布

で乳癌と診断された人は、幸いにも早期発見でした。

私達は、乳癌検診の機会を利用して、正しい自己検診の方法をマスターしていただき、月1回の自己検診と、年1回の専門医による集団検診によってさらに早期の乳癌を発見する努力を続けなければなりません。

“おばあさんは、乳癌にならない”という誤解

昨年1年間に乳癌検診を受診された人々の年齢構成を調べてみますと、表一1のようになります。受診される大半の人達は、30代、40代の人々で、全体の82%を占めます。

一方50代以上の人々は、15%で、60代以上となりますと稀か2.4%と非常に少ないのが現状です。一方乳癌患者さんの年齢構成をみてみますと、表一2となります。この表よりお解りの様に、乳癌の年齢ピークは40代(32.8%)であります。50代(25.3%)は、30代(16.5%)よりも多く、60代(16.6%)、70代(6.3%)の人達においても決して少ない病気ではありません。

50歳代以上の人達の受診割合が少ない原因は、対象としている地域の人口構成に因るかもしれませんが、多くの方々は、“乳癌は、若い婦人の病気であり、年齢とともに乳癌になりにくい”、“自分のおばあさんが、若い人々と一緒に検診するのがはずかしい”等の声を耳にしま

すが、決してそうではありません。最近では、お嫁さんと一緒に検診に来られるおばあさんも時々見られ、ほほえましい光景です。特におばあさんの乳房は、触診で容易に異常を見つけることができ、自己検診と年1回の定期検診を受けておれば、まず早期に発見され、安全な段階で治療できるものと思われます。私達は、50代さらには、60歳以上のおばあさん達が、気軽に検診を受けに来られる様な環境作りにも努めなければなりません。

昨年1年間で、微研病院外科で乳癌の手術を受けた患者さんの数は、64例でした。過去数年間と比較してみますと、明らかに増加していることが痛感されます。日本人に最も多かった胃癌の死亡率は、男女とも1960年頃をピークとして徐々に低下しています。一方、女性では、乳癌、大腸癌が増加してきました。この傾向は、今後ますます顕著なものとなっていくことが予測されています。乳房は、注意さえしておれば、自分で異常の発見できる数少ない部位です。“月1回の自己検診と年1回の集団検診”くれぐれもお忘れなく！

